

審査員賞

高校生部門

東京都文京区

私立中央大学高等学校1年

田部井 麻帆

かくされていたメッセージ

中学三年生の一月。それは受験生にとって、高校へ進学できるか、できないかが、じよに決まり始める時期であり、精神的なダメージを受けやすい時期でもある。私も、そんな大きく精神的ダメージを受けた受験生のうちの一人である。

第一志望の高校の受験約一ヶ月前。私は、いつものように塾へ行こうと準備していた時、母が帰って来た。

「あつ、おかえり。……お母さん？ どうしたの」お母さんは、私を無言で抱きしめ、言った。「ゆうちゃんがね……死んじゃったんだよ……」私はその時、母の言葉が、意味が理解できなかった。何を言っているんだろう。どうして泣いているんだろう。ようやく理解したとき、私の目からは大粒の涙が止まることなくあふれ出ていた。ゆうちゃんは、私と同年の女の子で、幼稚園からの親友である。約一年前からガンをわずらい、寝たきりの状態であった。お母さんに見送られて塾へついた私。塾に到着しても、私の涙は止まることなく、泣きながら先生に事情を話した。そして、先生は目に涙を浮かべながらゆっくり、あやすように話してくれた。

「俺もね、一年前に嫁さんが亡くなったんだよ。そりゃ、その時は悲しかったし、つらかった。でもさ、いつまでも亡くなったことを悲しむより、その子の分まであなたが生きないと、きつとその子も悲しいと思うよ」私はこの先生の言葉で残り一ヶ月間、何があっても耐えようと決意した。

それから私は、見事に第一志望の高校に合格する事ができた。それは、先生の言葉がなければ無理であったことだろう。そしてもう一つ、今になって気づいたことがある。ゆうちゃんのお葬式に行こうとした時、私の部屋の壁に掛かっていた時計が落ち、時が止まった。それは、“もう行くね”というゆうちゃんからのメッセージだったのかもしれない。